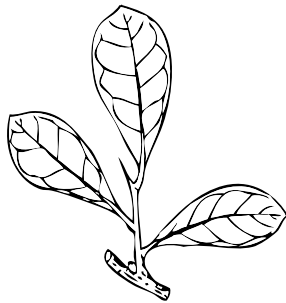


# Miyajima Natural Botanical Garden Newsletter



## 宮島自然植物実験所ニュースレター

Miyajima Natural Botanical Garden  
Graduate School of Science  
Hiroshima University  
Mitsumaruko-yama 1156-2, Miyajima-cho  
Hatsukaichi-shi, Hiroshima 739-0543

広島大学大学院理学研究科附属宮島自然植物実験所  
〒 739-0543 広島県廿日市市宮島町三ツ丸子山 1156-2 外  
Tel: 0829-44-2025; Fax: 0829-40-2001  
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/miyajima/>  
[miyajima@hiroshima-u.ac.jp](mailto:miyajima@hiroshima-u.ac.jp)

Number 10 June 2007

第 10 号 2007 年 6 月



開花したヤマグルマ *Trochodendron aralioides* Siebold & Zucc. (宮島, 2006 年 5 月 8 日撮影)

ヤマグルマは 5-20 m になる常緑樹。宮島では比較的低海拔の岩角地から尾根筋の岩場まで散見される。花はあまり目立たず、花期は 5 月上旬から 6 月中旬。別名トリモチノキと呼ばれ、樹皮からトリモチができる。

Evergreen tree or large shrub, up to 5-15(-20) m in height. Native to SW areas of Japan with an E Asia endemic distribution. Yellowish green flowers with ca. 50 stamens surrounding 5-10 carpels open in beginning of May to middle of June. The wood has secondary xylem without vessel elements: a feature quite unusual in angiosperms. The sole species in the genus, and sometimes used for bird liming, made from its bark.

(12 頁左に解説)

(坪田博美・向井誠二, English checking by Professor Dr. Rod Seppelt)

## 植物野外実習

福田雄一郎（広島大学附属三原中学校）

今回僕は、初めて植物野外実習に参加しました。学校からは、中学1年生が4名と2年生が7名、先生方2名の計13名が参加しました。参加は希望者を募る形だったので、実習の当日の朝はどんな人たちが来るのか分からずとても緊張していました。そして、緊張した気持ちのまま電車に乗りました。三原駅から乗り換えなども含めて約2時間で宮島口駅につきました。途中の道りでみんなと交流を深めていくうちに仲良くなりました。宮島口からは宮島連絡船にのり宮島まで行きました。航路の途中では鳥居を見たり写真を撮ったりしてとても楽しかったです。宮島に着くと、他にもどこかの修学旅行や観光でたくさんの方が訪れていました。また、鹿もいました。そして、今回の案内役をしていただいた坪田先生がいらっしゃいました。それでみんなで集まって出発しました。

行く途中に平清盛が建てたとされる巖島神社に後白河上皇が奉納された木や、伊藤博文が奉納された9本に分かれた松などがありました。そして、そこから実験所まで4kmにおよぶ道りを歩いていきました。途中、いろんな種類の木が至るところにありその1つ1つを教えていただきました。例えば、クスノキの葉にはダニ室と呼ばれる部屋があり、人間には害はないダニがたくさんいること、イロハモミジの果実は飛ばすところぐるぐる回転して落ちることや、クロマツとアカマツの違いが葉の先端を触ったときの痛さの違いで分かることなどがありました。2kmくらい歩いた

ところで昼食を食べました。するとその時、お弁当めがけて鹿が1頭急に走ってきました。お弁当のおかずを食べられた人もいてとても大変でした。

いよいよ実験所に着きました。そこで15分間、参加したみんなと坪田先生が言われたことなどについて1人ずつ発言し、意見交流をしました。例えば、ウラジロは毎年、葉の分かれ目から次の若い葉がでて成長する。ということを繰り返してだんだん成長するので、先祖を大事にしながら繁栄していくという意味で縁起がよいなど、みんなよく聞いていると思いました。次に実験所の周りの植物を観察しに行きました。そこには大元公園から実験所まで見てきた植物がたくさんありました。この実験所の敷地の植物のほとんどが、人が植えたものではなく、自然に生えたものだとことを聞いてとても驚いている人もいました。でも、僕が一番ビックリしたのは、敷地内に日露戦争の直前に造られた昔の砲台や弾薬庫があるということです。僕はこの実習で理科についてもっと興味が持てるようになりたいと思い参加しましたが、社会の歴史についても勉強でき、より一層興味をもつことができ、とてもよかったです。

最後に実験所職員の向井さんに船で送っていただきました。歩くのは大変でしたが、船はとても速く、鳥居をくぐることもできました。船で鳥居をくぐるができるとは夢にも思わなかったので、これだけでも実習に参加した甲斐があり、とてもいい思い出になりました。帰りの電車の中では、みんなぐったりとして疲れて眠そうでした。ですが、起きている人でトランプをしたり、今日行った宮島や実験所のことについ



ハマゴウなどが生育する海浜植生の観察（廿日市市宮島町室浜，2006年10月27日撮影）



室浜砲台跡の見学（廿日市市宮島町室浜，2006年10月27日撮影）

て振り返ったりしました。これからもこういう機会があったら参加したいと思います。本当にありがとうございました。

## 宮島自然植物実験所を訪問して

金丸純二（広島大・附属三原中学校 前副校長 /  
広島大・附属三原小学校 副校長）

10月初旬に、理科担当の中原先生より理科好きや科学の研究者を育てるには、「実際の物に触れること」が大切です。私がそういう機会を計画するので、“附属三原中学校の生徒を参加させてみてはどうですか”と提案がありました。理科が好きになり、より科学的に物事を調べることができるようになるきっかけづくりをするという提案に、私はすっかり同調して、その計画書を作成してほしいと、中原先生に依頼しました。日時については、本校の秋休みの期間で調整していただいた。提出された案を見て、私も広島大学の職員でありながら、宮島の中に広島大学の附属の宮島自然植物実験所があるとは・・・全く知りませんでした。そして、日程を最終調整しているとき偶然、教育実習生の指導に実験所所長の出口先生が附属三原中に来校されました。生徒と実験所訪問の計画があることをお話すると「是非来てください。大歓迎です。」とだけいただきました。野外活動に時期はよし、天気もよし、お弁当を食べながらハイキング・・・想定しながら1年生と2年生に呼びかけたところ、11人の生徒が希望してきました。

当日の朝、7時に三原を出発し、8時47分に宮島口に着きました。そして宮島に着いてみるとまず目に飛び込んできたのは、やはり鹿でした。鹿に見とれていると、本日宮島を案内していただく坪田先生がすでに待っており大変恐縮してしまいました。坪田先生から、宮島は“自然を壊さないように、できるだけ人の手を加えないようにしている”というお話を聞き“限りなく自然に近い島”なんだと思いました。そのような自然が生きている宮島の中を、宮島自然植物実験所に向けて植物観察をしながら徒歩で移動した。途中、食事をしているところへ鹿が走ってきて、生徒の食事を少し食べたというハプニングがあった。普段の生活では普通に食事をすることが自然の中では普通ではないということが体験でき、大変楽しかった。

宮島自然植物実験所で少し休憩を取らせていただき、その後、実験所周辺を案内していただいた。その際、植物のことだけでなく、室浜砲台が存在したのは、歴史的にも重要な拠点として宮島が位置づけられていた証拠であることも教えていただきました。帰りは、また徒歩で宮島棧橋まで帰るものと思っていたら、技術職員の向井さんがモーターボートで送ってあげようという提案をいただき、手を挙げて賛成しました。しかも、宮島口に帰る途中で船を鳥居の下を通していただくという経験をさせていただき感動しました。

坪田先生には植物を観察しながら、丁寧な指導を受けたことはもちろんであるが、心温まる歓迎に感謝の気持ちでいっぱいです。また、違うコースもあるというお話を伺いました。来年もこのような計画が組めるなら、生徒を募集して参加したいと思います。出口先



野外実習後の集合写真（廿日市市宮島町室浜 宮島自然植物実験所前、2006年10月27日撮影）



朱の大鳥居のそばで記念撮影（廿日市市宮島町、2006年10月27日撮影）

生、坪田先生、向井さん有り難うございました。

## 白糸川の砂防堰堤構築と弥山原始林における植栽について

豊原源太郎（元広島大・院・理）

宮島が世界的に有名であるのは、歴史的建造物の厳島神社があることと、その背後にある弥山原始林と厳島神社の建造物との調和が素晴らしいからであり、それは宮島町民だけのものではなく、世界全体の資産として後の世代まで今の姿を残すべきであるという趣旨で世界遺産に登録された。これまで、宮島の人達はこの資産に依存して生活してきた。古来、宮島の人達は宮島の自然と厳島神社に寄り添って生活してきたのであり、その優れた景観・風致による恩恵を受けてきた。厳島神社と宮島の自然が街の暮らしを支えてくれた大切な資産であり、通俗な言い方をすれば宮島の自然と厳島神社が飯の種である。宮島全島が神の島として大切にされ、特に弥山山塊の自然林は立派であるとして国の天然記念物「弥山原始林」に指定されている。原始林とは人手の入らない自然林のことであり、自然植生であることの価値が認められたのである。一方で、宮島には道を外れるならば極めて危険な自然があり、



図1. 白糸川上流の土石流発生地点の位置。白糸川上流の海拔約400 m地点から土石流がはじまり、白糸川下流にある大聖院をかすめて、宮島の市街地まで達した。

登山家であっても侮れない山なのである。自然とはそのようなものなのである。

平成17年9月6日に発生した土石流は弥山原始林の中央部分を貫通するもので、白糸川下流部の大聖院をかすめて、宮島の商店街にまで達する大規模なものであった。幸い人命に関わる被害はなかったものの、自然の猛威に皆驚嘆し、二度とこのような災害が起こらぬように上流部に巨大な砂防堰堤を築く計画が実行に移されようとしている。災害防止上やむを得ないことかもしれない。しかし、本当に大規模土石流再発の可能性が大きいのか、小さな堰堤では駄目なのか、専門家による調査結果が待たれる。それというのも、砂防堰堤は弥山原始林の中央部に予定されており、宮島の風致を著しく損ねることが危惧されるからである。工事による自然破壊が更に周辺に拡大するのではなかろうか。

また、土石流により生じた裸地に植栽する計画もあ



白糸川上流の土石流発生直後の様子（対岸の大野側より撮影、2005年9月7日）



白糸川下流の崩壊直後の様子。大聖院周辺（宮島白糸川、2005年9月9日撮影）

るという。そのみか、台風による倒木で弥山原始林の植生が損なわれた場所にも在来種による植林の計画もあるという。世界遺産に登録された宮島の自然、天然記念物弥山原始林の保全を目的とするのだということである。被災者の心情を思えば、何か抜本的な対策をとってほしいと願うのは当然のことであり、行政もそれに答えるべく万全の対策を講じようとするのも理解出来るので賛同者は多いものと思われる。

しかし、初心に戻って、宮島はなぜ世界遺産に登録されたのか、弥山原始林はなぜ天然記念物になったのかを考えたとき、宮島の自然の価値が認められたからであることを思い起こさなければならない。その自然に対して、巨大な人工構造物を作り、植林を行うなど人為を加えた場合、宮島の自然は世界遺産、天然記念物としての価値を保つことはできないのではないかと危惧する。人為的に創られた原始林などあるわけがないので、場合によってはその名を返上することさえ

も考えなければならないのではないか。この点については、宮島の文化財保護審議委員会で今後検討されることであろうが、大変な決断が要求されているので、そう簡単には結論が出ないであろう。宮島町民においても、飯の種を失ってでも安全を優先させるべきなのか決断を迫られる事なのかもしれない。いずれにせよ現場がどうなっているのか自分の目で確かめなければ議論にも加われないのであるが、現在、弥山登山道は通行止めとなっている。私としては、やはり宮島は名実ともに自然の豊かな所であってほしいと願うものである。宮島の自然を重視するのであれば、むき出しとなった岩肌は自然であり、コンクリートの堰堤とは全く違うので、それ自身宮島の自然を損なうものではないので人工的に緑で覆う必要はない。自然に苔むすのを待つことができないのだろうか。

宮島には、広島大学大学院理学研究科附属宮島自然植物実験所があり、宮島の優れた自然を対象として教



滝町の様子。滝橋上の土砂や流木を撤去した後の様子  
(宮島白糸川下流, 2005年9月9日撮影)



白糸川上流の崩壊地の復旧の様子。約400m地点から北側を望む。中央が堰堤(宮島白糸川, 2007年1月31日撮影)



土石流発生約2か月後の崩壊地の様子(宮島白糸川上流,  
2005年10月26日撮影)



白糸川上流の崩壊地の復旧の様子。第一堰堤付近の歩道  
(宮島白糸川, 2007年5月8日撮影)

育・研究を行い、世界遺産に登録された弥山原始林を中心とする宮島全島の保全について提言をしてゆくことを目的とした施設である。私は現在の施設の前身である宮島自然植物園が出来た昭和39年から宮島の植生を調査し続けて今日に至る。安全と自然のどちらを優先させるべきかは、個々人により考え方も違うのでそのような研究は行っていないが、人為を加えた場合、植生はどの様に変化するのかということについては当実験所の得意とする専門分野である。現在、弥山原始林以外の宮島の約90%を占める国有林の部分については、林野弘済会や森林管理署と共同で研究し、どの様に保全するのかを検討してきている。最も広面積を占めるマツ枯れ跡地については自然の回復力に任せて森林の更新が行われており、植林など人為を加えることは行わないことにしている。しかし、ミヤジマトンボの生息地についてはトンボの生存を最優先として植生に多少の人為を加えてきているし、包が浦の「悠久の森」では潜在自然植生に基づいたクスノキの植栽を行い、一部植林地ではヒノキの樹皮を採取するための手入れを行うなど、人為を加える所も僅かに存在する。それらは、地域住民の連帯を促し、宮島の自然保全の重要性を体験するためのイベントとして位置づけられる。現在、宮島の自然を保全する上で最も求められているのは、鹿による食害対策であり、弥山原始林においても次代を担う更新木が被害に遭っており、食害の方が重大な問題となっているのであるが、意外に関心が低い事が残念である。

(この記事は、2005年9月の土石流発生直後に書かれ、デジタル自然史博物館宮島館のサイトにすでに掲載されているものです。2007年3月の堰堤完成に際し、再び啓蒙する意味を込めて掲載しました。)

## 先輩の声：「新社会人の今日このごろ」

黒田有寿茂（兵庫県立大学自然・環境科学研究所）

宮島自然植物実験所では6年間お世話になりました。実験所では、アカマツ二次林の遷移や、同二次林の優占種の生態について研究していました。現在は、兵庫県立大学自然・環境科学研究所（兵庫県立人と自然の博物館兼務）に勤務しています。普段の活動場所である人と自然の博物館では、主として植物を対象と

した研究・展示・教育普及活動に携わっています。また、博物館に設置されているジーンファームという施設の管理と活用を担当しています。ジーンファームは、主に絶滅が心配されている植物を保全、栽培する施設です。ファームに生育中の植物の生育状況を日々観察しながら、今後どのような方針のもとに植物の保全活動を進めていくか思案する毎日を過ごしています。研究にしても、そのほかの業務にしても、限られた時間の中で成果を取っていくことが求められますのでなかなか大変です。1日があっという間に過ぎてゆきます。おかげで早起きの習慣がすっかり身につきました。

博物館には、植物や植生のほか、動物、生態系、地質、化石、都市計画などを専門とする研究員の方々がいます。このほか事務職員、フロントスタッフ、警備、清掃職員の方々など、実に様々な人が協働して博物館の管理と運営にあたっています。赴任してから約2ヶ月が過ぎましたが、この間、学生時代には触れることのなかった様々な状況に遭遇し、あたふたとしつつも、充実した日々を送っています。一方で、自由きままに動ける学生時代をもっと大切に過ごしておけばよかったと思うこともしばしば。学生時代にどれくらい自分の視野を広げ、深めておくことができるかが如何に大事か、今更ながら痛感している社会人3ヶ月目の今日このごろです。

時折手を休めぼんやりしますと、学生の頃が思い出されます。当時は、豊原源太郎指導教官をはじめ、大変多くの方々にお世話になり、またいろいろと鍛えていただきました。今こうやって植物や植生を見ながらあれこれ考えることができるのも、学生時代にたく



ジーンファーム内の人工池について高校生に説明している様子、左端が著者（2007年5月3日撮影）

さんの方に支えていただいたからだと思います。この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

(上記執筆後、さらに1年ほど経ちました。2年目からは、自分が責任者となって企画・実行するセミナーも始まりました。相変わらず試行錯誤の日々が続いております。)

編集者注. 著者は2006年(平成18年)3月に博士課程後期を修了しました。この原稿は2006年6月に書かれたものを、2007年5月に追加・改訂したものです。

## 先輩の声:「一芸」

徳岡良則(農業環境技術研究所)

私は修士課程の2年間、宮島自然植物実験所に配属され、山陽地方の照葉樹林の種組成や植生遷移に関する研究を行っていました。大学院在籍中は、指導教員の豊原源太郎先生や実験所職員の向井さん夫妻をはじめ、実験所や研究科に関係する多くの方々に支えられ、充実した2年間を過ごすことができました。

現在は、茨城県つくば市にある独立行政法人農業環境技術研究所の生物多様性研究領域に属し、農業活動と生物多様性の関係について研究しています。農業を行なう上で、管理コストの削減と生物相の保全が両立可能となるような植生管理法を提示することを究極の目標として、日々仕事に取り組んでいます。

就職して気付いたことは、他人に負けない、もしくは



水田の周辺の植生調査の様子(2007年5月31日撮影)

は他人に無い何かをもつことの大切さです。私の周りにはそのような何か“一芸(もしくは多芸)”に秀でた方が非常に多く、研究者の場合、それらが直接仕事に反映されていたり、また仕事のストレスを発散させ仕事の能率を上げることに役立っているように思います。一方で、私もいくらか趣味と言えるものを持っていますが、自分で自信をもってアピールできる“一芸”を持っていないため、学生の中に自分が興味を持ったことにもう少しじっくり取り組んでいればよかったと今になって感じています。是非、皆さんは学生生活の自由な時間を有意義に使ってください。

編集者注. 著者は2006年(平成18年)3月に博士課程前期を修了しました。

## 植物観察会の記録

豊原源太郎(元広島大・院・理)

植物観察会がヒコビア会と宮島自然植物実験所の共催で毎月1回行われている。以下は、2006年7月から12月までの記録である。

### 7月23日 庄原市(旧比婆郡西城町)比婆山県民の森-立烏帽子山

2006年7月23日の第445回植物観察会は比婆山県民の森(立て烏帽子山)において行われた。比婆山県民の森公園センター前駐車場に10時集合。参加者39名。ナツツバキの白い花は満開である。ハルニレの大木の下で登山ルートを説明。六ノ原-展望台-烏帽子駐車場-天然記念物比婆山ブナ純林-越原越-六ノ原。天気予報では午後雨で、雨天覚悟の登山である。展望台まではイヌシデ、ヨグソミネバリ、ミズナラ、クリなどの混交する二次林であるが、ブナもあり、植物は結構豊富である。弾力のある黒ぼく土壌で、歩きやすいコースである。なぜか二次林の林床にトウヒを植栽した一面がある。展望台からは毛無山方面の眺望がすばらしい。マムシが多い所なので要注意。ヒノキ植林の中で食事。立烏帽子駐車場にはダイセンキスミレが僅かに残存していた。ブナ原生林は、林床にササがなく、シダが豊富な型の群落である。沢筋にはオオモミジガサが蓄をつけており、オニシモツケは白い花



観察会集合後の行程説明 (庄原市比婆山県民の森, 2006年7月23日撮影)



観察会集合写真 (三瓶山, 2006年8月20日撮影)



イケマ *Cynanchum caudatum* (Miq.) Maxim. (庄原市比婆山県民の森 - 立烏帽子山, 2006年7月23日撮影)

をつけていた。越原越からはヒノキ植林の中を下山する。午後3時に公園センターに到着と同時に雨足が激しくなり、幸運であった。

### 8月20日 島根県大田市 三瓶山

2006年8月20日の第446回植物観察会は島根県の三瓶山において行われた。東の原スキー場駐車場に10時30分集合。参加者は48名。今回は、地元の実家のある石橋昇氏に企画していただいた。また、元森林総研の埴田宏氏も定年退職後帰広され、早速参加していただいた。スキーリフトによりオミナエシ、カラナデシコ、マツムシソウ、コオニユリなどの花を眺めながら女三瓶山と大平山の鞍部まで一気に登る。ホツジ、ツシマママコナ、ヤマホタルブクロの花。鞍部から室内池に向かって急斜面を下る。カシワ林が多いので驚いた。ミズナラなどの二次林の林床にフシグロセンノウの花が多いのが印象的である。ナンバンハコベとコフウロの花は久しぶりに見るものであった。



フシグロセンノウ *Silene miqueliana* (Rohrb.) H.Ohashi & H.Nakai (三瓶山, 2006年8月20日撮影)

池の周りにはズミが多いが、池から離れたところではクヌギとカシワが多くなる。昼食後大平山に登った後、スキー場の中を下山した。草原にはキキョウとホクチアザミを探したが見つからなかった。そのことは、深入山や恐羅漢山(近年破壊された)の草原に較べて、三瓶山の草原は、草原としての歴史が浅いことを語るものである。

### 9月17日 豪雨のため中止

2006年9月17日の第447回植物観察会は台風に伴う豪雨により、広島から三段峡方面への交通が遮断されたために中止となった。ヒコビア植物観察会の活動は自然観察会でもあり、郷土の自然を見守る(nature watching)会であることから、雨天も寒冷な冬の日も自然の一面であるので毎月1回雨天決行を旨としている。しかし、危険回避が第一であり、これまでに2回中止された。この観察会は、昭和31年頃から始まり、堀川芳雄先生を囲んで行われてきた植物採集会





コオニユリ *Lilium leichtlinii* Hook.f. f. *pseudotigrinum* (Carrière) H.Hara & Kitam. (三瓶山, 2006年8月20日撮影)

に端を発しているが、堀川先生が退官された昭和41年前後には植物採集会が行われなくなっていた。大学紛争の最中、学生の間にも再開をとの要望もあり、当時大学院生であった私（豊原）が会の再編を手がけました。第1回は昭和44年5月15日に広島市宇賀峡で行われたと記憶している。というのも、その日が丁度学生運動による理学部封鎖の日であり、私は参加出来ませんでした。その第1回は鈴木兵二先生が参加して再開されました。以後毎月行われて、今年(2006年)の12月には記念すべき第450回が開催される運びとなりました。その間2回中止されているのでそれを加えると10月が450回になります。紛らわしくなるので今後は中止も回数に加えることにしました。

**10月22日** 山県郡安芸太田町 いこいの村ひろしま - 奥三段峡

2006年10月22日の第448回植物観察会は、先月台風のため中止した奥三段峡において行われた。深



観察会集合後の行程説明ともみじの解説 (奥三段峡, 2006年10月22日)



キクバヤマボクチ *Synurus palmatopinnatifidus* (Makino) Kitam. (奥三段峡, 2006年10月22日)

入山いこいの村の駐車場に10時集合後、奥三段峡の入口まで車で移動。参加者は51名。もみじには少し早い時期であったが、ハウチワカエデが他の樹木に先駆けて紅く色づいていた。イロハモミジはまだ緑を保っているが、少し赤黒く色づいていた。もみじとは植物の葉が秋に色づく現象を指し、黄葉、紅葉および褐葉の3種類ある。いずれも老化現象の現れであるが、そのうち紅葉だけは植物の生活に役立っているようである。葉緑素は低温で紫外線により分解しやすくなる。イロハモミジの葉が赤黒く見えるのは、葉緑素を少し分解してアントシアニン（赤い色素）を合成して紫外線を防ぐフィルターの役をするようであり、そのことにより2週間位、光合成期間を長引かせているようである。少しでも長く葉に働いてもらいたいと言うことらしい。よく見ると日当たりの良い枝の葉が赤黒くなっている。赤くなってしまった時点では、葉緑素が殆ど残っていないので植物に役立つ働きはなく、もみじ狩りで私たちを楽しませてくれている。



奥三段峡。道が悪かったためこの周辺を観察した後引き返した（2006年10月22日撮影）



観察会集合後の行程説明（倉橋島，2006年12月4日撮影）



リンドウ *Gentiana scabra* Bunge var. *buergeri* (Miq.) Franch. & Sav. (奥三段峡，2006年10月22日撮影)



ナナミノキ *Ilex chinensis* Sims (倉橋島，2006年12月4日撮影)

#### 11月12日 廿日市市吉和 もみのき森林公園

2006年11月12日の第449回植物観察会は廿日市市吉和もみのき森林公園において行われた。行楽シーズンとあって、バスを借りることが出来なかったため、乗用車に分乗して公園センター前に10時集合。参加者は68名。今年の紅葉は例年より1、2週間遅いようであるが、もみのき森林公園まで来るときれいな紅葉が見られた。サイクリングロードを歩いて、もみのき湿原のところまで行き、そこから林の中の小道を下って午後1時過ぎに公園センターに到着。今回はヒコビア観察会第450回という節目ということで広間を借りて昼食会を行った。昼食の後、この会の当初の様子、植物採集会から観察会に名称変更をした趣意、今後のあり方などについての話があった。三上幸三、関太郎、豊原源太郎の3氏に会の功労賞が授与された。

#### 12月4日 呉市倉橋島鹿老渡 遠見山

2006年12月4日の第450回植物観察会は倉橋島鹿老渡遠見山（102m）において行われた。旧鹿老渡小学校校庭に10時30分集合。参加者は55名。久藤先生から観察コースの説明を受けた後、近くの海辺にある神社に行き、タイミンタチバナ、アラカシ、ネズミモチ、ヤマモモ、マサキ、トベラ、ツルナなどを見る。今回の目的の一つは、海崖にウバメガシの自生があるかどうかであり、この神社に直径約25cmのウバメガシが1本あったが、植栽されたものかもしれない。さらに近くの砲台跡にも幼木を見ることが出来たが、以後ウバメガシを見ることはなかった。砲台跡にギンヨウアカシアが1本植えられていた。遠見山に向かう途中の海岸にハマゴウ低木林があり、海崖にシャリンバイが黒い果実をつけていた。アセビ、ソヨゴ、イヌツゲ、リョウブを探しながら遠見山に登ると、リョウブが北斜面と山頂に僅かであるが見られた。道端にはフサアカシアが植栽されていた。また、山麓にフィリピン原産のソウシジュ（黄花）の植栽が見られ



植物観察会第 450 回記念集合写真（廿日市市吉和もみのき森林公園，2006 年 11 月 12 日撮影）



野外での観察の様子（廿日市市吉和もみのき森林公園，2006 年 11 月 12 日撮影）



講演会場の様子（もみのき森林公園センター，2006 年 11 月 12 日撮影）

たが、広島県に植えられているのはオーストラリア東部原産のヤナギバアカシア（別名、メラノキシロンアカシア、メラノキシロン）（薄黄 - 白花）かもしれないので花期に確かめてみたい。また葉色も多少違い、ソウシジュの仮葉は濃緑色であり、ヤナギバアカシアは黒緑色の仮葉である。

### 植物観察会第 450 回記念行事について

向井誠二・坪田博美（広島大・院・理）

植物観察会第 450 回を記念して、2006 年 11 月 12 日、廿日市市吉和もみのき森林公園において、昼食会および講演会が盛大に行なわれた。午前中の観察と昼食会の後、公園センターの大広間を会場として功

労賞の受賞講演が行なわれた。植物観察会の母体であるヒコピア会の出口博則会長から、観察会の概略について説明があった。それに続いて功労賞授賞式が行なわれ、三上幸三、関太郎、豊原源太郎の 3 氏に賞が授与された。講演を予定していた三上氏は、体調の関係で残念ながら欠席された。関・豊原・坪田・向井・松村氏らにより、会の発足当初の様子や歴史、今後のあり方などについて話があった。プロジェクトを使って昔の写真の提示も行なわれ、皆なつかしい様子であった。また、植物採集会から観察会に名称変更をした趣意や植物の採集などについての話があった。古参の方々の顔も多く拝見でき、会場全体が昔の話で大いに盛り上がった。講演会の後、センター前で記念撮影を行ない、現地での解散となった。

追記: これまで豊原が会の運営と講師を担当してきましたが、2007年から複数の担当者により分担する形式になりました。なお、観察会の事務局はこれまで通り宮島自然植物実験所です。

### 表紙の植物 – ヤマグルマについて –

ヤマグルマ *Trochodendron aralioides* Siebold & Zucc. は日本と台湾にだけ分布し、本種が含まれるヤマグルマ科 Trochodendraceae も東アジア特産。葉は厚く光沢があり、長い葉柄をもち、枝先に束生する。本種は多心皮である点や被子植物でありながら導管ではなく仮導管をもつ点などの特徴から、植物分類学上原始的な植物と考えられてきた。その原始性から、いずれも単型科の扱いで、新エングレー体系ではモクレン目 Magnoliales に、クロンキスト体系ではスイセイジュ科 Tetracentraceae とともにヤマグルマ目 Trochodendrales におかれていた。最近の分子系統学的研究により、真正双子葉植物 Eudicots の中で比較的初期に分岐した群であることが明らかになっている。APG II 植物分類体系では、ツゲ科 Buxaceae などとともに、真正双子葉植物 Eudicots の多くの群が含まれるコア真正双子葉類 Core Eudicots と姉妹群あるいはそれに準じた系統関係にある群とされ、真正双子葉植物の直下のヤマグルマ目におかれている。

**編集後記:** 諸事情により予定より遅れましたが、今号のニュースレターを無事発行することができました。450回記念行事も無事終わった観察会は、500回に向けて、1月から新体制で開催しております。今後ともご参加頂きますようよろしくお願いいたします。また、4月から5月にかけて、園内に掲示した植物名プレート の点検・更新を行いました。園内の散策の際ご活用頂くとともに、お気づきの点がありましたらご連絡ください。英文はセツペルト教授に、仏語による紹介はソフィーさんにお世話になりました。次回のニュースレターは秋を予定しています。(向井・坪田)

---

### 宮島自然植物実験所ニュースレター

編集・発行 宮島自然植物実験所

廿日市市宮島町三ツ丸子山 1156-2 外

印刷 ニシキプリント

広島市西区商工センター 7 丁目 5-33

---

## Jardin Botanique Naturel de Miyajima Université d'Hiroshima

### Personnel

Directeur et Professeur: Dr Hironori DEGUCHI

Professeur Associé: Dr Hiromi TSUBOTA

Technicien: M. Seiji MUKAI

Gardien: Mme Mieko MUKAI

### Histoire et Objectifs du Jardin Botanique

Ce jardin a été créé sous l'impulsion du professeur honoraire Yoshiwo HORIKAWA en 1964. Il ne s'agit pas vraiment d'un jardin botanique, mais plutôt d'un centre d'expérimentation et de recherche en botanique, attaché à l'université d'Hiroshima. Son objectif est la protection de la nature et de la flore de l'île de Miyajima.

### Activités du Jardin Botanique

**Domaines de recherche:** biologie insulaire, phytogéographie, taxinomie, systématique, écologie.

**Principales collections:** végétation spontanée de l'île d'Itsukushima (plus communément appelée île de Miyajima, inscrite sur la liste du patrimoine mondial de l'Unesco), plantes vasculaires et bryophytes (mousses) du Japon avec l'herbarium de l'université d'Hiroshima (HIRO-MY).

**Activités pédagogiques:** centre de recherche des étudiants de l'Université d'Hiroshima, centre d'éducation de plein air des collégiens et lycéens de la préfecture, centre d'observation de la nature et de la flore, centre d'actions bénévoles du Ministère de l'Environnement, siège de l'association d'observation botanique Hikobia depuis 30 ans.

### Adresse

Mitsumaruko-yama 1156-2, Miyajima-cho,

Hatsukaichi-shi, Hiroshima 739-0543, JAPON

E-mail: miyajima@hiroshima-u.ac.jp

Site web: <http://home.hiroshima-u.ac.jp/miyajima/>;

<http://www.jardinsbotaniquesjaponais.fr/Miyajima.htm>

Tel: +81.829.44.2025; Fax: +81.829.40.2001

(Texte écrit par Mme Sophie LE BERRE)